

るの は な

千葉大学医学部同窓会報 第55号

編集兼発行者

千葉大学医学部

るの は な 同 窓 会 報 編 集 部

千葉市亥鼻1の8の1

千葉大学医学部記念講堂内

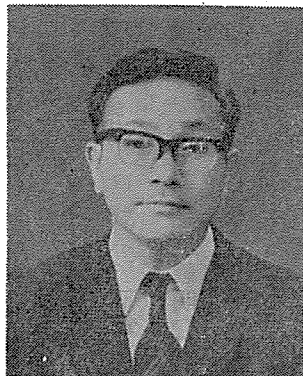
久々の教授選考

生理学第二講座

主任教授決まる

◇金沢大・本田良行氏

病氣療養のため休職中の福田篤郎教授(生理学第二講座)が多い。現在呼吸生理についての後任については、村山智教授(専門家が意外にも少ない生理学(薬理学)を委員長とする五教団)においては、その面における第



福田篤郎教授(生理学第二講座)

答申され、十二月二十四日の教授一線の研究者であることはひとに会において「千葉大学医学部教授」とみとめられてゐる。本田氏は候補者選考内規に従い審議し、授は正十五年生(四十七才)、昭和二十五年に金沢大を卒業し、母校の生理学教授に就任。研究をすすめてきたが、昭和二十七年より二年間オランダのナイメーゲン大学のクロイツァー教授のもとへ留学、一段と呼吸生理の研究をすすめてきた。運動脈球に関する研究でも、ねてより本学助研との協同研究もあり臨床生理学への関心の高い方でもある。三浦光彦助教授とのタ

館野講師(放射線)

中央放射線部助教授に



新病院の建設を機に、中央診療施設の新設が計画されてきたが、一昨年には中央手術部が、いまだ中央放射線部が新設された。中央放射線部は診療科の放射線関係の中で、

概算要求

講座の増設決まる

年度ごとの大学の発展をきめる基本的事項として重要な文部省概算要求事項があるが、昭和四十九年度の本学医学部についての予算内示が十二月二十九日あきらかに次なる事項があらたにもうけられることとなった。

その第一にあげられるものは、講座の増設として「内科学第三講座」が認められたことである。行政管上の定員削減の施策の流れの中の新設とあって、構成

秋の叙勲

三輪、福沢、尾本の三先生へ

十一月三日、文化の日昭和四十八年度秋の叙勲者が発表された。これは三十九年に春秋二回の生存者叙勲が復活してから二十回目で、今回の三千四百四十四人を

入ると、受賞者総数は五万八千六百八十八名、勲三等三百七十一名が受賞された。

章を、千葉大学名誉教授三輪清三先生(七十才)が、勲三等瑞宝章を、千葉大学薬学部教授、医学部付属病院薬剤部長、福沢寿先生(七十二才)が受賞された。

文化功労者の一人として、国保国アナ大学のウェーバー博士が遺伝子の問題につき興味深い話をされた。

海外より学究の来学しきり

最近海外からの学者の来学がふえてきていることはよく知られていて、ここに若い医師、研究者、学生たちへの影響はすくなくないといわれる。各教室主催のこれらセミナーの記録がどこにもまとめられないところがあり、以下の記事も記憶をたどつてのものという不手際であり、書きもらしのあることをお詫言すが、学外同窓の皆様には近頃の学内の動きの一端として、十月、十一月にわたるものをまとめてみることにした。

十月九日(第一内科)スエーデンのカロリンスカ研究所のグルベルク博士が内因性の免疫の問題を話されたが、同じ十月九日(第二生化学)カリフォルニア大学のシクミラー博士が痛風の問題につき貴重な講演をされた。十月十三日(脳研)バツファローのローズウェル博士が脳の微小循環につき動脈の分離灌流を中心に明快に話された。十月十八日(第二病理)スクリップ・ファウンデーションのデイクソン博士が来学、腎炎の問題を免疫の立場より詳細に説明された。十月三十一日(第二外科)日系人としてカリフォルニア大学で活躍しているポール寺崎博士が白血球の型別中心に、十一月五日(第一、第二生化学)には、インデ

大学に思う (3)

鈴木五郎

今回から臨床教室についての述べたい。

内科で講義をきいた先生と云えば相戸留吉、竹村正、岡田清三郎先生等、井上善次郎先生は千葉の三輪、井上として世間に知られた先生だが、井上病院を開校され私は直接的関係はなく、その有名な著書の世話にはなった。今日でもその本がある。

竹村先生は種々やられたとか、風格別なるものがあつた。馬術部長をして思い出も多い。始めて乗って四街道から千葉迄、遠業されたには驚き尊敬の念すら湧いた。私は種々と世話になったが、「君は馬を買いなさい」等といわれ、とんでもないことを云うものだと思つた。先生の治療を受けたこともあるが、先生の病気を治療したこともある。先生が胃潰瘍で吐血されたとき、高橋、佐々岡先生について角田君と輸血の用意をして参上したが、当時の内科的見解は輸血をして血圧が上昇すると再出血の危険もあるというので、とうとう輸血は出来なかったことを思い出す。時代がそうであつた。兎にかく一度おさまる東大で塩田重雄先生の手術をうけられ健康をとりもとしたのであつた。

その後何年かしてから丹毒で一外科へ入院され、今は亡き桑原君(川名正義と同級)が担任で随分努力したが止る所を知らず結局亡くなされた。それも後にして思えば申し訳もない所である。大分

腹痛を訴えられたのであつたがその時どう診たかの記憶が判然としないが、東大からも内科の先生が来られたりした。亡くなつて解剖の結果は胃切除のときの縫合クラメルを中心に化膿し穿孔が判明した。松宮良様は鎌倉に住まわれていたが一昨年から亡くなった。

相戸留吉先生は第二内科でこい勉強家の評判があり、その診察態度には非凡なものが見られたが、或る古参の医局員が「Heater」等隙口をきいたのが記憶に残る。私は学生時代はよく病気を先生のお世話になつて居る。割合早く退職して今の柏戸病院を開校され、門前市をなしたことは人の知る所である。岡田先生は臨時に来られた様だが、Basalを始め取り入れ第一外科では申状腺のそれを検査したらしい。

後の一内教授石川先生からは講師の頃に文線の話を書いたりした。助教の頃に深部を備えて種々と仕事をされたが、当時二内に林信雄、一内に林井が助手で居るレントゲン室を石川先生が持つていた。竹村先生の後任教授になられたからもう一つお付き合いをお願い。三輪清三君、湯田好一君、高瀬潤一君等々の関連もあつた。内との関係はつきない。現教授の奥田邦雄君も無縁でない。

第二内科の佐々良教授の講義はきかなかったが、先生が当時の大変貴重な経験をした。

ロスの一年

稲垣義明(二内)

一九七二年八月より一年間、Lilly International Fellowとして、ロサンゼルス郊外にあるCity of Hope National Medical Center Department of Carbiology 2楼の機会をえた。わたしのボス Simon Rodbard 教授はアメリカにおける秀れた心臓病学者の一人であり、これまで、氏のもとで学んだ日本医師も少なくない。東のこの講義出るアイデアの多くは、今まで発表した業績も多く最近是非血的心機能検査法を開発し、これが Rodbard 法としてアメリカ全土に普及しつつある。わたしくも十数年間、心機能の非観血法に興味をもつて来たので、大変貴重な経験をした。

想像した以上に、アメリカでは増していた。彼等は動脈硬化の冠動脈硬化性の疾患、狭心症、心筋梗塞が多い。それも硬化度が日本とくらべものにならないくらいひどい。胸部X線像で冠動脈の石灰化を見た例がしばしばあつた。したがってアメリカでは、内科的に冠動脈を拡張しようとしても、ひろがる余地がなく、冠動脈外科の発達したものとなつて来た。このような冠動脈硬化をきたす大きな原因の一つはやはり食生活であらう。ちなみに、健常者の

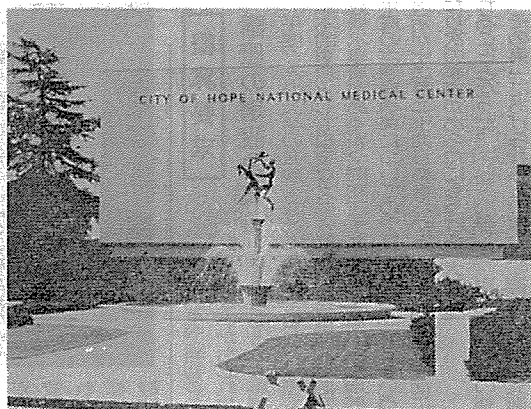
アメリカ留学の始めまた終りに、小川先生宅に立寄られる本学関係者も多い。この一年間に、小林龍男・三輪清三名誉教授、中山恒明前教授をはじめ、一内東條、成田、解剖嶋田、病理近藤、岩崎、泌尿器科中田、脳外中田、整形外科の諸先生などにお会い出来た。わたしとしては、入国翌日に同級の薬理村山教授に所を交えてロスのホテルで会えたのが何んとか妙で忘れられず、また一内関係者木下、長谷川、道場(生理)君にも会え、日本との距離の短縮をつつく感じさせられた。

ロスは気候がよく、食物も豊富で、言葉の不自由さがなければ、これほど住みやすい所はないの印象をうける。しかし、唯の輸送力が自動車であるこの街は、場所にもよるが、たつた一人の人間を運ぶための大型車の洪水によって、スモッグの発生は大変ひどい、改善の一つとして、フリーウェイの一車線をバス専用にして、利用者は少ないといふ。ともあれ空気が汚染は、東京よりひどいように感じた。

血清コレステロール値は三〇〇なして活躍されていた。わたしくもいし三五〇である。波米直は同時期に留学していた二内科前のわたしのコレステロール値は二七〇であったが、お前は何を肺外科嶋田晃一郎君(UCLA)に食っていたのかと笑われた。始め食っていたのはアメリカ食を、困つては相談にゆき、大変中心に食っていたが後半は飽きてお世話になった。

ロスはアメリカの入口でもあった。それにもかかわらず帰国直後、また出口でもある。したがって、コレステロール値は二二〇と五で、国際学会出席の行きかえり、

大変有意義な一年を過ごすことが出来たが、帰国して第一にびっくりしたことは、食生活の水銀汚染騒ぎで安全性のため魚の肉食に切りかえつつあるとの由。これでは日本人も近い将来、欧米並の心動脈硬化化が起るうるのはないかと、あのひどい冠動脈の石灰化像を思い出しつつ、何んとか、科学の力によって、海の幸に恵まれた昔の日本列島に改造してもらいたいものと思つて感じた。



●三共が開発したマイナートランキライザー

セレナル

SANKYO 共

健康保適用品 (要指示医薬品) (副作用、使用上の注意は添付文書をご覧ください)

卓球部

だより

◇リーグ戦主管校を引受け
て

昭和47年度の秋期関東医科学学生卓球リーグ戦は、本学の主管で11月始めに行われた。表面上、大会はなんの事故もなく、まずまずで終了。試合の方は、夏の東医体で4位であったわが千葉は、学4二人の抜けた穴があまりに大きく7位に終わった。木村先生の「勝つことに意義がある。」との開会のお言葉が耳に響いた。裏の話、関東リーグには参加費というものを金を出さねばならない。ところが西千葉体育館を使用したので、使用料ゼロ。どれほど浮いたかは、兵隊さん(頭を使わず手足のみを使用する者)であった筆者は知らない。しかし、夏の合宿を涼しい軽井沢のような所でやったりする私立医大の金持が、参加費をまける、など言ってきたのは多少憤慨した。つぎに裏の裏(これが本音)を言わせてもらえば、まあ主管をした時の兵隊さんなんて、すなわち雑用係なんだから、嫌になるだけ、無しですませられればそれに越したことはない。

昭和48年3月、学4の卒業式(大学の方)が済んで、ホッとした頃、卓球部においても卒業式(他部の部では追コンと呼んでいるらしい)が行なわれる。今年度も二名優秀な人材(これは卓球部におい

ての話であって、大学の成績の方は知らない)を送り出した。

◇五大学定期戦から慶応戦まで

昭和48年度の五大学定期戦は、新潟大学の主管で行なわれ、この試合には昨秋の関東リーグで活躍した石毛先輩も出場できなかった。小林、小川両先輩に加え、最初から苦戦が予想され、結果は個人戦では丹羽君が3位、白幡さんが1位と好調でしたが、団体戦では全くふるわず、部員一同実力不足を痛感した次第。試合のあと特にみんなの思い出になっているのは、東北大をはじめ、他大学の十数人と連れ立って佐渡へ旅行したことでしょう。ちょうど観光ツアーが始まったところで、まだ人も少なくレンタカーを駆ってのドライブは、とても快適でした。

新学期が始まると、新入生の争奪で、どのクラブもあわただしくなります。卓球部でもいい人材を獲得しようと、みないっしょけんめいのはりきり、結局男4人、女2人が入部しました。

宮木高明所長急逝す

生物活性研究



千葉大学生物活性研究所の宮木高明所長が一月九日死去された。同所長はかねてから高血圧に悩んで居られたが、十二月二十三日、ご自宅で脳出血でたおれ、直ちに

戦が、千葉主管で行なわれ、団体戦でも新人戦でも勝利を手にできた。(平井) 〇首脳部交替とOB会の復活

7月中旬からは、新人の育成と東医体の優勝を目的として合宿。よくよく一年生もクラブに慣れ、練習にもついてこれるようになってきたため、涼しい夜の時間も練習に励みましたが、病人が出ることもなく、無事に合宿を終りました。かなりの練習を積んだつもりですが、群馬での東医体では、惜しくも東邦大に優勝をさられ、われわれは個々の力不足を痛感するとともに、チームの和といふことだけでは不十分だと悟られました。

その間、日本学術会議委員に二期当選されたほか、文部・厚生関係の多くの要職を勤められた。このたびの生物活性研究所の発足に当たっては、その敷地をのほな地いたまれるものである。

いま・むかし
鶴ノ森(大巖寺)

千葉市の東南にあたる生実には、通称鶴ノ森があった。これは当地にある大巖寺の枯巨木に鶴が鈴なりに止っていたための称である。先日この鶴ノ森をたづねて道を聞いたところ、近所に住む者ですら知らないという。何時の間にか運称は消えてしまったのである。やうとさがしあてたところ、鶴は一羽もいない。鶴がなくなつてからこれ一〇年というかは減ってしまったようである。

計報



会員のうち次の方々が逝去されました。謹んで哀悼の意を表し、ご冥福をお祈り致します。

椎橋淳一(大)	48・10・27
高田進(昭)	48・11・25
吉橋孝(大)	48・12・8

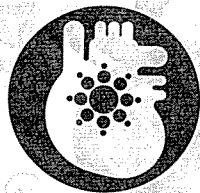
高田進先生は前埼玉支部長として、また吉橋先生は評議員として本会創設初より尽力された方です。

Drug Rehabilitation

薬価基準収載

●薬価

錠：8mg | 錠 16.20
注：0.2% | 管 75.00



冠循環・心機能改善剤

イラダマン® 錠・注
(塩酸オキシフェドリン)

中外製薬株式会社 東京都中央区京橋2-2

